

# 維新史回廊だより



第24号  
2015年  
9月発行  
年2回発行

■編集 維新史回廊構想推進協議会  
■発行 山口県総合企画部スポーツ・文化局文化振興課  
(山口市滝町一一一TEL 083-1933-1161-17)

維新史回廊だより第一四号をお届けします。今年は井上馨の没後100年に当たります。高杉晋作、伊藤博文らとともに幕末明治維新にかけて活躍した井上馨について広島大学名誉教授の三宅紹宣先生に解説をお願いしました。

## 井上馨—熱誠の開明派

はじめに

本年二〇一五年は、井上馨が没して100年目に当たります。井上といえば、明治時代の外務大臣として不平等条約の改正に取り組み、それを進めるための鹿鳴館に象徴される欧化政策が、一般にはよく知られています。井上の生涯にわたる幅広い活動について、限られた字数で紹介するのは困難ですので、ここでは山口県に関係の深い、幕末維新期を中心にして述べてみたいと思います。

井上馨は、天保六年（一八三五）十一月二十八日、周防国吉敷郡湯田村高田（現山口市湯田温泉、井上公園の南半分）で、長州藩士井上光亨（おおくみひつやう）の次男として生まれました。井上家は、大組で石高一〇〇石でした。大組は、藩士の中核で、藩士総数五六七五人のうち上位二五%を占めていました。また、一〇〇石以上の藩士は全体の一%しかいません。石高一〇〇石は多めではありませんが、長州藩においては上位に位置し、井上

家は上級武士ということができます。知行地は、吉田宰判伊佐村（現美祢市）にありました。

しかし、その生活は質素で、屋敷の周囲に所有する田地一町、畠地四五反の耕作にも従事していました。幼いころは、山口後河原の稽古場に通いました。一二、三歳のころから上田茂右衛門について文学を学び、諸武芸を修業しました。

嘉永四年（一八五一）、一七歳の時、兄とともに萩に出て、藩校明倫館に学びました。安政二年（一八五五）、大組で二二〇石の志道慎平の養子となりました。



井上馨銅像（昭和31年再建）  
(山口市湯田温泉 井上公園)

年七月、攘夷方針に転換しました。

攘夷運動が高まるなか、幕府は品川の御殿山にイギリス公使館の建設を始めました。高杉晋作は、「幕府が攘夷の朝廷の命令を受け入れなら、公使館を新築するのは許せない。これを焼き討ちして攘夷ののろしをあげよう。」として、文久二年十二月十二日、建設中の公使館を焼き討ちしました。実行したのは、高杉、井上ら合計一三人でした。井上は焼弾に火を付ける役でした。発火の後、井上はもう一度引き返し、さらに念を入れて戸板などを積み重ねて火を放ち脱出しています。井上の豪胆で綿密な性格がうかがえます。



慶応年間の井上馨

(上野彦馬撮影・東京都港区立港郷土資料館蔵)

Q イギリス留学の目的と、勉強はどのようなものですか。

文久三年（一八六三）一月、京都にいた井上は、信州松代の佐久間象山の話を伝え聞き、海軍興隆の志を固くし、その研究のために海外留学の希望を懐きました。留学を藩政府に願つたといへ、周布政之助、桂小五郎らは希望を認めました。さらに山尾庸三、野村弥吉（のち井上勝）も同行を認められ、やがて伊藤博文、遠藤謹助も加わりました。かくて五月十一日夜、五人はイギリスの船に乗つて横浜から出港しました。出発に当たり、井上は五月十一日付で五人連署の告別書を藩政府員あてに書き、お金がかかることは恐れ多いが、「生きた器械を買ひ」ように思つていただきたいと、海軍興隆にかける覚悟のほどを述べています。

文久二年（一八六一）、世子毛利元徳の小姓役となり、江戸に行きました。ついで、海軍研究のため、英学を修業しました。

Q イギリス公使館焼を諂ひの目的は何ですか。

一九世紀、西洋列強は半文明国や未開地の植民地化を進めていました。日本もその危機にさらされていましたが、幕府は西洋列強の圧力に屈して開国しました。それに對し日本の独立を保つことを目指す人々は、対抗の姿勢を示すべきだとして、攘夷をとなえました。長州藩も文久二

年七月、攘夷方針に転換しました。

攘夷運動が高まるなか、幕府は品川の御殿山にイギリス公使館の建設を始めました。高杉晋作は、「幕府が攘夷の朝廷の命令を受け入れなら、公使館を新築するのは許せない。これを焼き討ちして攘夷ののろしをあげよう。」として、文久二年十二月十二日、建設中の公使館を焼き討ちしました。実行したのは、高杉、井上ら合計一三人でした。井上は焼弾に火を付ける役でした。発火の後、井上はもう一度引き返し、さらに念を入れて戸板などを積み重ねて火を放ち脱出しています。井上の豪胆で綿密な性格がうかがえます。

五人は九月にロンドンに着き、日夜、辞書を使って英学を勉強しました。それにより英字新聞も辞書を片手に読めるようになりました。特に日本についての記事に注意を払っていました。

元治元年（一八六四）三月、長州藩による下関での外国船砲撃に対す

Q 長州藩に帰つてどのような論を主張しましたか。

六月二十五日、井上は政事堂に出頭し、海外の情勢を説き、開国の必要を説きました。六月二十七日の御前会議においても開国論を主張しましたが、藩の方針は変わりませんでした。

止戦講和への取り組みは成らず、八月五日、イギリス・フランス・オランダ・アメリカの四国連合艦隊は下関の砲撃を開始しました。井上は山口に帰つて戦況を報告し、山口の入り口小郡を死守すべき策をとねえ、第四大隊を率い、小郡代官になりました。

八月七日朝、小郡において毛利元徳から止戦講和の方針で任に当たるよう命を受け、高杉が正使となり、杉孫七郎と渡辺内蔵太が副使、井上

の報復が行われるとの説が流れました。井上は、藩の危機を救おうとして、伊藤とともにロンドンを出発しました。

二人は、六月十日ころ横浜に着き、イギリス公使オールコックに止戦講和の任に当たりたいと嘆願しました。そこで外国艦によつて豊後国姫島まで送られ、二人は山口に帰りました。



長州藩英國密航留学生集合写真

(萩博物館蔵) (前列左側が井上馨)

Q 袖解橋の遭難はなぜ起こったのですか。

元治元年七月十九日の禁門の変の責任を追及するとして、長州藩追討の朝廷の命令が出されました。幕府は三〇余藩に長州藩への出兵を命じました。長州藩内では、幕府に謝罪するににより許しを乞う絶対恭順の俗論派が台頭しました。

これに対し、井上たちは、幕府がもし武力で攻めてきたら、抗戦すべきとする武備恭順をとりました。両者は対立を深め、藩の方針を決めるため九月二十五日、山

口 中河原の藩庁政事堂で  
御前会議が開かれました。絶対恭順の主張に対

し井上は武備恭順で反論し、激しく論が戦わされました。会議は容易に決せず、午後四時、藩主毛利敬親は武備恭順の裁定を下しました。



世外井上馨侯遭難之地 石碑（大正6年9月1日建立）

（山口市中園町）

午後八時、井上は政事堂を出て、湯田の自宅に向かいました。その途中、袖解橋の付近で、俗論派の刺客三人におそ

われ、全身に数力所の重傷をおいました。暗夜で、里芋の畠の中に倒れたため、刺客も見失って去りました。井上は、はって近くの農家にたどり着き、もつこに乗せられて家まで送られました。そこに駆けつけたオランダ医学を修めた所郁太郎ところいくたろうが、六力所の傷口を疋針で五〇針も縫合する大手術を行い、次第に回復することができました。

Q 長州藩元治の内戦での活動はどうのようなものですか。

俗論派の武備恭順派への弾圧が続くなか、元治元年十二月十五日夜、高杉晋作は長府の功山寺で決起しました。諸隊も萩を目標として進発し、翌慶応元年（一八六五）一月六日夜、鎮静軍との間で大田絵堂の戦いが始まりました。諸隊のうち御楯隊は、小郡さらに山口までやってきて協力を要請しました。これに応じ山口においても鴻城軍が結成され、井上が総督に迎えられました。

大田の諸隊は一月十九日、山口に移り、山口を拠点にして萩の俗論派政府を包囲する形で攻撃しました。このなかで俗論派は政権を失い、藩論は回復し、三月二十三日、武備恭順の方針が定まりました。

Q 薩長同盟や幕長戦争（四境戦争）での活動はどうのようなものですか。

薩長同盟は、禁門の変で戦火を交えた者が同盟を結ぶという困難な途でした。お互い相手に対する疑惑がありましたが、薩摩藩の名義を借りて銃や軍艦を買い、実績を積み上げようとしたしました。そのため井上は、慶応元年七月、伊藤博文とともに長崎まで出かけて薩摩藩の小松<sup>たてわけ</sup>帶刀と交渉し、銃の購入を実現させました。さらに鹿児島にまで行って交流の足がかりを作りました。

慶応二年六月七日、幕府軍艦は熊毛半島の先端を砲撃し、幕長戦争が開戦しました。井上は、最初は石州口の奥阿武郡参謀を務めましたが、七月六日、希望していた芸州口に転じ、膺懲隊御用掛を務め、亀尾川口

参謀も兼帯しました。芸州口では激戦が展開しましたが、八月七日の戦争で勝利し、九月一日休戦講和を結びました。

Q 明治政府での主な活動はどうのようなものですか。

井上は、明治四年（一八七一）、大蔵大輔だいすとなると、国立銀行の設立など開化政策を進めました。その後、実業にもたずさわりました。

明治十二年、外務卿となり、ついで外務大臣となりました。この間、治外法権の撤廃を中心とする条約改正交渉に当たり、国民の文化に西洋風を導入することが、交渉を有利にすると考え、鹿鳴館を盛んに利用し、欧化政策を進めました。しかし、その改正案は日本の主権を損なうものであるとの反対運動が高まり、二十年辞職しました。

その後、農商務大臣、内務大臣、大蔵大臣を務めました。明治三十四年には、組閣の大命を受けましたが、辞職しました。

大正四年（一九一五）九月一日、静岡県興津（現静岡市）の別邸で病死しました。八歳。墓は、東京都港区西麻布の長谷寺にあり、分骨墓が山口市洞春寺にあります。

#### 〈参考文献〉

井上馨侯伝記編纂会著『世外井上公伝』（内外書籍、一九三三年）

中原邦平編述『井上伯伝』（中原邦平、一九〇七年）

堀雅昭『井上馨 開明的ナショナリズム』（弦書房、一〇一三年）

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。

次号は、来年3月発行の予定です。どうぞ御期待ください。